

目的 農村の高齢化は昭和35年以降急速に進み、60年センサス結果では65才以上人口は14.3名を占めるにいたっている。しかし、現状では1人暮らしの老人や高齢者夫婦世帯は都市に比べると少く、大半は家族との同居であり3世代家族、4世代家族の一員として暮らしている。これらの高齢者の行動と意識を通して生活問題の所在を明らかにすることを目的とする。

方法 今年度(61年度)調査は、1年度新潟県、2年度静岡県における調査に引き続き栃木県の水田酪農地域2ヶ所において60才以上の高齢者を対象として実態調査をおこなった。

結果 今回は水田酪農地域2ヶ所で実施した調査結果であり、既に調査した2県とは異なり大衆畜である乳牛飼養農家を対象としたので、3名以上経営農家が80名以上を占める経営規模の大きい地域である。乳牛飼養農家の高齢者が担っている農作業は朝食前の乳牛への給餌作業が多いが、A地域では53.1名、B地域では35.7名が農業には従事していない。世代別家族構成をみると、2世代家族がA地域13.8名、B地域32名、3世代家族A地域72.4名、B地域71.0名、4世代家族A地域13.8名、B地域25.8名で3世代家族のうち両地域で各1戸は隠居家に住み、双方で干渉しない自由な暮らし方をしている例もみられた。老後の生活費についての高齢者の意識は、A地域では「働けるうちに準備する」という自主型が多く、B地域では「家族がみるべき」という家族依存型が多く、両地域とも自主型と家族依存型であり、社会保障への期待は僅少である。高齢者の生活は、地域の自然的・社会的・経済的条縛の下でつみ重ねられたものであり、経営形態の差を反映している。